



# ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

## 3. 熱走編〈下〉

ALPHA POLIS

柳内たくみ

Takumi Yanai

ALPHA POLIS 文庫



# 主な登場人物

Main Characters



シャムロック・ハ・エリック

ティナエ政府  
最高意思決定機関  
『十人委員会』のメンバー。



メイベル・フォーン

亜神ロウリとの戦いに敗れ、  
神に見捨てられた亜神。  
徳島達と行動を共にする。



徳島 甫  
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。  
特務艇『はしだて』への配属  
経験もある給養員(料理人)。



ドラケド・モヒート

アヴィオン海海賊七頭目の  
一人。義理人情に篤く、  
部下に慕われる。



オデイル・ゼ・ネヴュラ

ドラケ海賊団オデイル号の  
船守りを任される漆黒の  
翼皇種の少女。



オデット・ゼ・ネヴュラ

翼皇種の少女。  
戦艦オデット号の船守り。  
プリメーラの親友。



江田 島五郎  
えだじまごろう

海上自衛隊一等海佐。  
情報業務群・特地担当統括官。  
生粋の“艦”マニア。

## その他の登場人物

レディ・フレ・バグ ..... 海に浮かぶ国アトランティアの女王。

ダーレル・ゴトーハン ..... アヴィオン海海賊七頭目の一人。

濱湊 伸朗 ..... 海上自衛隊ミサイル艦隊司令。

黒須 智幸 ..... 海上自衛隊ミサイル艦『うみたか』艦長。

高橋 健二 ..... 海上保安庁一等海上保安正。

アマレット ..... プリメーラ付きのメイド長。

イスラ・デ・ピノス ..... シャムロックの秘書。



シュラ・アーチ

帆船アーチ号船長。  
正義の海賊アーチ族。  
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ・アヴィオン

ティナエ統領の娘。  
極度の人見知りだが酒を飲む  
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺

●ロンデル

帝都●

●イタリカ

◎アルヌス

碧海

グラス半島

エルベ藩王国

クンドラン海

トユマレン

●メキド

アヴィオン海

碧海



「へえつ、ここが海賊の本拠なんだ」

徳島とくしまは感心の声を上げた。

「凄い、凄いですよ。徳島君！」

振り返ると、江田島えだじまも海に落ちかねないほど手すりから身を乗り出していた。前を見ても後ろを見ても船という、アトランティア・ウルースは、彼にとっては天国といえるところなのだ。

オデイル号はアトランティア・ウルースの船団毎に設けられた水路をゆっくりと進む。

「このウルースは別に海賊の本拠って訳じゃない。だが、大抵の海賊達にとっては故郷にはあたると思う」

オデイル号の船長ドラケは徳島に説明した。どうもドラケはパッサムを追放して、

### アヴィオン海周辺



代わりに徳島を司厨長<sup>しちやう</sup>として迎えたいらしく何かと近付いてくるのだ。

「船長はこちらの出身なんですか？」

「出身地は別のところだ。俺はある程度の歳になってからここに流れてきたんだよ」

ドラケは徳島にアトランテアという国の成り立ちを語った。そして言った。

「海で生活する民が何も全員海賊という訳じゃない。ただ必要だから海賊行為もする。食べていくためなら何だってする。それが海の民なんだ」

だから海賊を主たる職業にすることにも抵抗はない。海賊にウルース出身者が多くなっているのもそのためなのだ。

「海賊の出自は様々だ。陸で生まれて生活をしていたのに、海の民の一員になって海賊となった者だつて大勢いる。俺も厳密に分類するとその一人になるだろうな」

「海賊にもいろいろな人がいるんですね」

「徳島君、徳島君！ あれを見てください。五段権船<sup>ごだんけんせん</sup>がありますよ！」

あまりにも多くの船が寄り集まっているため、そこは船の博覧会のような。中にはよくぞこんなものが海に浮かんでいられるなど、感心してしまうほど古い船もあった。

「す、すみません。騒がしくつて……」

子供のようにはしゃぐ江田島を見てドラケは苦笑した。

「いや、いいさ。ここまで喜んでもらえたら、こつちも嬉しくなるからな」

苦笑しているのはドラケだけではない。周囲の海賊達はほとんどが呆れていた。

「あれが私の父上……」

若干ファザコンの気配を感じさせる目でエダジマを見つめるトロワを見て、徳島は警告した。

「決めつけてしまうのは性急に過ぎるよ。トロワという名前が偶然に一致しただけかもしれないから。過度の期待は禁物だからね」

「でもエダジマの娘は、パウビーノになっているんでしょう？ だったらそれは私かもしれない。ドラケだって間違いないって言ったし」

どうやら徳島の警告もあまり効果がないようであった。

そもそもトロワがこんなことを言うようになったのには、理由がある。

オデイル号の客人となった江田島に対し、ドラケが一番最初に行ったのがパウビーノの少女を紹介することだったのだ。

「この子の名前はトロワって言うんだ。つまり、お前達が探している子供と同じだ。お前が探しているのはこの子なんじゃないかと俺は思う」

「まさか!？」

だが、江田島は頭を振った。娘を探しているなんてことは、もちろん嘘だからだ。当然、トロワという少女の容姿や来歴も全てが架空だ。いかに異世界とはいえ、想像上の人物が人の姿となつて実際に現れることなどあり得ない。とはいえ、そうは言えないからこう返す。

「この少女の面差しから見ると、自分の娘とは思えませんねえ」

そもそも母親と死に別れた娘などこの世には大勢いる。その中で魔導の力を僅かばかり備えている子も少なくない。パウビーノの女の子を全て調べればトロワと似たような境遇の娘は大勢いるはずなのだ。

しかしドラケは続けた。

「でもよ、この子の目鼻立ちはお前にそっくりだと思うぞ!」

「そ、そうですか?」

「ああ、そうだ。よく見れば部分部分で似てるしな」

実際、ドラケの言うように、トロワは江田島にどこか面差しが似ていた。

もちろん中年男の江田島そのものならば、この少女は容姿の点で酷いハンデを背負つてしまふだろう。しかしトロワは美しかった。将来、傾城の美女になることも期待でき

る素質の片鱗がそこかしこに見られたのだ。

つまりドラケが言いたいののは、目元とか、かほたち顔貌を構成するパーツの一つ一つにどこか類似点があるということ、そしてそれは確かにその通りだったのだ。

偶然とは恐ろしいもので、さすがの江田島もこの事態だけは予想していなかった。とりあえずはつきりしないから保留ということにしたものの、これをきっかけにトロワのほうが、江田島が自分の父親なのではと期待する素振りを見せるようになったのだ。

トロワは幼い頃、慈童院に引き取られたそうだ。

魔導の才能があると分かつて魔導師に弟子入りして、しかしこれ以上は伸びることはないと破門の扱いを受け、やさぐれた生活に入った。その後、独りぼつちで必死に生きてきたのである。

希望のない毎日。昨日と同じ今日を過ごし、おそろくは今日と同じ明日が続く。

そんな日々の中で父親かもしれない存在が現れ、しかも自分を探していたと聞かされたら、孤独の寂しさや未来のない生活から解放されることを「期待するな」と言うほうが無理だ。

「なんだ、違うと言ひ張るのか? その根拠はなんだ?」

ドラケは娘が見つかるはずがないと決めつけている(ように見える)江田島の態度を

訝しがった。

「いや、この子は慈童院出身だそうですし」

「そんな人攫いがお前の女房から子供を拐かしたあと、何かの理由で慈童院前に捨てたかもしれないじゃないか」

「そ、それはそうですが」

江田島はあまり強く主張できなかった。間諜と間違われ、処刑されそうになったこともある。これ以上は周囲の猜疑心を掻き立てるような言動は控えるしかないのだ。

江田島は演じるしかなかった。必死になって娘を探していた父親の姿を。思いがけず娘と出会ってしまったがため、かえってそれを受け容れることが出来なくなっている複雑な心境を。

だから徳島が成り代わって言うのだ。

「早まらないでください。他人のそら似というのもあります」

するとオデイルが混ぜっ返しにかかる。

「そら似だっていいじゃんかよ！細かいことをグチグチ言うなよな」

それを聞いたトロワが表情を陰らせる。

「違うのですか？」

徳島は少し厳しめな口調で語りかけた。

「こればかりは、いい加減のななあで済ますことは出来ないからね」

もちろん、好き好んでこんな意地悪な言い方をしている訳ではない。少女に過度の期待をさせて後でガツカリさせるようなことを防ぐには——そして必ずその時は来る——こんな意地悪な言い方をするしかないのだ。

「困ったな。じゃあどうすればいい？ どうすれば納得する？」

ドラケは嘆息した。この男も根が単純なので、当人同士が納得するなら実際の血の繋がりになんてまったく気にしないのだ。

するとその時、蒼髪の娘メイベルが皆を救うかのように告げた。

「こういう時こそ、母神ナレッドの神託を受ければよい」

「ナレッド？」

「魔母ナレッド……子供を食らう悪鬼転じて、母子を守護する神となった。ナレッドの神殿に参れば、本当の親子かどうかの神託を得られるはずじゃ」

「へえ、そんな神がいるのか」

ドラケは聞いたことがないと言う。もちろん徳島も江田島も初めてだ。鬼子母神の由来に似ていると思うだけで。

しかしこの世界には、数多の神があらゆるところにいる。巨大な神殿で祀まつられているような神もいれば、祠ほこりしかないような神もいる。そうした全部を把握している人間なんて、その道の専門家ぐらいなのだ。

「分かった。で、そのナレツドの神殿とやらはどこにある？」

ドラケはメイベルに尋ねた。

「神殿は帝国の領内奥深くにある。ここからなら、碧海へきかいの北にある手近な港に着けてもえればよいじやろう。そこからは陸路で旅をして……」

「ちよつと待て。それってトロワとエダジマが揃って参拝しないといけないのか？」

「無論じや。親子関係の有無を尋ねるのじやぞ。当事者がいなくてどうする？」

「参つたな……」

それを聞くとドラケは頭を抱えた。

「どうした？」

「トロワはうちのパウビーノなんだ。神殿参拝のためとはいえ、勝手に休みをくれてやる訳にはいかんだ」

「船長というのは船のあらゆることに権限を持つと聞いておるぞ。オデイル号の船長はお前なのである？ お前がその気になればかようにでも出来るのではないのか？」

「確かにそうなんだが……パウビーノはとあるところから大砲と一緒に借り受けているだけで、後で返さなきゃならんだ」

貴重な情報が得られて江田島は身を乗り出した。

「つまり一種の派遣社員みたいなものですね？」

「派遣つてのがどんなことかは知らないが、まあ、そういうことだ」

するとその時、オデイルが言った。

「でもドラケ！ こいつはダーレルの船にいたんだろ？ 奴に捨てられたんだろ？ あんたはこの誰とも分からねえ娘つ子を海で拾っただけで、パウビーノだったなんて知らなかったことにすりゃいいじゃんか？」

するとドラケは情けなさそうな顔をした。

「そんなことして後でバレたらどうなると思う？ そんなおつかないこと出来るかつてのー！」

「は、海賊七頭目の一人ドラケ・ド・モヒートが随分情けないこと言うじやないか？」

「仕方ないだろ？ 今や海賊稼業は大砲がなくちゃ成り立たない。その大砲の供給を一手に担っているギルドに睨にらまれたら、大砲もパウビーノもみーんな引き上げられちまう。そうになったら俺達は食っていけなくなっちゃうんだぞ」

一連のやりとりで、江田島はパウビーノや大砲の秘密は、その貸し出し主たるギルドにあると目星をつけた。後はそのギルドとやらがどこにあるかを聞き出せばいいのである。

「分かりました。ではそのギルドの者に私を引き合わせてください。トロワについては私が直接話を付けます」

「おい、どうしたんだ？ さつきとは打って変わって積極的になつたな」

「この娘と私が、本当に親子なのか白黒付けなければ気分が悪いからですよ。この娘にはつきりしないまま期待させ続けることだって、いいことだとは思えません」

「そういうものかねえ……」

江田島の言葉を聞いてドラケはしばらく考え込む。そして振り返って叫んだ。

「よし、決めた！ 航海士、針路を変えるぞ。目標はアトランティア・ウルース！ 航行計画を立てろ！」

「ラーラホー、船長！」

航海士が海図を見て航行計画を立てる。そしてドラケに変更すべき針路を告げた。

「アトランティア・ウルースとは？」

待っている間、江田島はドラケに尋ねた。

「もちろんギルドのあるところだ。決まってるだろう？ よーし、風下に舵を切れ！」

するとオデイル号は、青い海面に白波で大きく弧を描いて旋回した。そしてその針路をアトランティアへと向けたのである。

\* \* \*

アトランティア・ウルースに到着すると、ドラケは乗組員に上陸許可を出した。

ウルースは船が寄り集まり鎖で繋がれたものだ。それだけに『上陸』という言葉の使用には違和感があるが、他に表現のしようがないのでこの言葉を使っていた。

オデイル号の乗組員にはこのアトランティア・ウルースに故郷の船がある者も多い。そのため、みんな家族や昔の知り合いを求めて続々と上陸していった。

メギド族の島と同様に、ここは海賊が大手を振って出歩ける数少ない場所なのだ。

そのためこのウルースの地を初めて踏む者も、そうした土地勘のある者に連れられて船を降りていく。きつと彼らの案内で安心して飲める酒場、安心して飲み食い出来る店へと連れていかれるのだらう。そして夜通し飲み続けるのだ。

「お前達、騒ぎを起こしたりするなよ！」

ドラケは船を降りていく海賊達に声を掛けた。到着して分かったのだが、今、王城船に外国からの使節が来ているとかで、警備の兵士が多くなっていた。

「分かってますよ。今の女王陛下（イラム）はお行儀がよいのがお好きですからね」

女王（イラム）は海賊が酔って騒いだり、何かと乱暴な騒ぎを起こすことを非常に嫌って、厳しく取り締まるよう命令しているという。外国からの使節が来ているとなると、特に警戒も厳しくなる。もしも捕まればドラケがもらい下げに行くまで酔っ払いは拘束されてしまうのだ。

「おい、行くぞ。エダジマ、トロワ、支度しろ！」

そしてドラケもまた、江田島とトロワ、そして徳島とメイベルを引き連れ上陸した。

「時にオデイルはどうして付いてくる？」

ドラケは更に後に続く黒翼の娘に尋ねた。

「ここまで来たら乗りかかった船じゃないか!? トロワの件だって見届けたいし。まさかここまで来て仲間外れだなんて言わないだろ、ドラケ！」

「しょうがねえなあ。なら付いてこい」

一行はまず、大型船の甲板に作られた屋台街の一角にある飯屋に入った。そこで肩が

ぶつかるほど押し合いへし合いしながら木製の食卓を囲むのだ。

オデイルは窮屈そうにしながら尋ねる。

「まずは腹ごしらえってことかい？」

「いや、飯だけが目的じゃないんだ」

ドラケは皆に説明しつつテーブル上にナイフを置き、コイン三枚を並べていった。その動作は何か特定の決まり事でもあるかのように慎重だ。

「何してるんだい？」

オデイルはテーブルに並べられたコインを見て尋ねる。

「……もしかして何かの合図ですか？」

まるで謎解きのように江田島が尋ねた。

一方、徳島とメイベルはそんなことには目もくれず、アトランティアで出される独特の料理に舌鼓を打っている。

「これは美味いよ。フカの肝を発酵させてそれを味付けと保存に使っているんだ。こういうのはそれぞれの世界で個性が出るねえ。くさやに似ているから日本に持って帰っても受け入れられると思うよ」

「躬みはこの匂いがちよっと苦手じゃ」

「メイベルは納豆もダメだったよね。匂いは発酵食品の宿命みたいなものだからなあ」  
大洋に浮かぶアトランティア・ウルースでは塩の入手が難しい。海水に囲まれてはいるのだが、海水を煮詰める燃料の木材が貴重なため、煮炊きする火ですら節約を迫られるのだ。

おかげで塩も高価になる。そうなると結晶化した塩を魚や肉にまぶして挟み混んでしまう「塩漬け」という方法が使えない。そのため魚や肉類は少し濃い目の海水ともいえる塩水に漬け込む形で保存される。するとどうしても発酵が進んでしまうのだ。そうした理由で、海の民の食卓は新鮮な魚か発酵食品かという食文化が成立したのである。

「ご注文は決まりましたか？」

やがて店員がやってきて、ドラケに尋ねた。

すでにテーブルの上には料理が並んでいる。みんな徳島のように食べている最中なのだ。だから問いかけるとしたら「追加ですか？」と尋ねるべきところである。なのに店員はあたかもこれが初めての注文であるかのような態度をとった。

ドラケは鷹揚たかように言った。

「ニイラ魚を樽一杯に入れてくれ」

「そんなに食べられるんですか？」



店員は驚きの表情で目を丸くする。

「余ったら、フカのエサにするつもりだ」

「樽一杯だと、何匹になりますか？」

「二百匹は入るはずだ。塩水で漬け込んでくれ」

「樽はいくつ用意いたしましょう？」

「五十個だ」

「運び手が必要ですね？」

「もちろんだ。金を出さずからそっちで運んでくれ」

「かしこまりました」

店員はテーブルのコイン三枚を拾い上げて懐に入れる。そしてそのまま立ち去った。するとしばらくして再びドラケの前に店員が戻ってきて一枚の紙片を差し出した。

「おっ、すまん」

ドラケは皆を振り返ると腰を上げた。

「お前達、行くぞ」

だが徳島やメイベルは待つてくれとせがむ。食卓に載せられた料理の半分も攻略し終えていないのだ。

しかしドラケは急かす。

「ダメだ。指定された時間までに着かないと全てが最初からやり直しになっちゃう」

「やり直し？」

「いちいち説明させないでくれ」

江田島が腰を上げる。

「世知辛いことですが仕方ありません。二人とも行きますよ」

「俺達が行こうとしているのは秘密結社なんだぞ。世知辛くもなるさ」

「秘密結社？もしかして例のギルドのことでしょうか？」

「まあそうだ。これにはそこにたどり着くための道程が書いてあるんだ……急げ」

続いてオデールとメイベルが腰を上げる。こうなっては仕方がないと徳島も後ろ髪を引かれながら席を立った。

「まだ食べ切れてないのに」

未練を断ち切れないその心境は、立ち去り際に皿に手を伸ばす様子からも察すること出来るのだった。

店の片隅にいた人物が立ち上がったのはその時である。

分厚いマントを羽織り、ターバンで頭部を覆った細身の人影だ。店から外に出て行く徳島達を観察していたらしい。

その人物は徳島達が立ち去ると、すぐに後を追おうとする。

「まちなさあい……」

だがマントの裾を引つ張られてしまう。袖を握ったのは、傍らに腰掛けていた小柄な人物だ。

小柄な人物の注意は辺りを徘徊するアトランティア海軍の兵士に向けられている。三人一組の兵士が周辺を巡回しているのだ。

「分かりました」

そして二人は巡回が立ち去った後、徳島達の背中がほとんど見えなくなってから店を出たのである。

\* \* \*

「ここは？」

徳島は周囲を見渡しながら問う。

ドラケは店を出ると舷梯を渡り、船の通路を曲がった。そしてまた隣の船に渡り……無数に並ぶ中型船、小型船を経てとある船に辿り着いた。

この辺りの船の多くは——特に区画の内側に位置する船は——独自航行能力を失って久しいと思われる。索具ロープの類が干からびていて、見ただけでも硬くなっていると分かるのだ。

イメージとしては、バケツの縁にぶら下がったカチカチの雑巾といったところだろう。こんな風になってしまった索具ロープはもう使用できない。力が掛かったらたちまち千切れてしまう。

「これを見るに目的の船はこの辺なんだが……なんか妙だな。別に海賊が騒ぐような酒場がある訳でもないのに兵隊がやたらと多いぞ」

この船区に入ると兵士達の姿が至るところに見られた。

声を掛けてみれば、海外からの使節団が来ているので警備体制が強化されているという。おかげで徳島達は何度も不審尋問を受けることになった。

「ここは王城船から随分と離れているはずなんだが」

ドラケが兵士に愚痴るところ返してきた。

「さあな、俺達は命令された通り警備するだけだから」

「そりゃそうか」

ドラケはそんな中で、単独で航行する能力がなんとか残っているとされる船の前部甲板に立った。

オディールが問いかける。

「ドラケ、ここがそうなのかい？」

「多分そうだ……」

答えるドラケの表情は、微妙に自信なさげだ。

「多分？」

「しょうがないだろう？ 俺だつて凄く久しぶりなんだ。けど、どうにか間に合ったようだな」

「間に合うって何が？」

ドラケが答える前に答えは示された。五回の時鐘が鳴らされると、その船は隣の船との束縛が解かれたのだ。

船員達が甲板に上がってきて帆が上がり、水路に出て船ごとの移動が始まった。

江田島はそれを見てなるほどと手を打った。

「そういうことでしたか！ 確かに船が寄り集まって出来た都市では、引越は簡単

ですね。船そのものが移動してしまえばいいのですから。そして船を頻繁に移動させていればアジトの位置を他人に知られにくくなる。今どの区画に繋留けいりゅうされているかを知っている者だけがやってくる事が出来るのですね？」

ドラケは頷いた。

「ま、そういうことだ」

「この船がギルドとかいう秘密結社のアジトなのですか？」

「正式な名前はなんていったかな……カウなんとかギルドだ。俺達にも分からんような知識やら技術なんかを蓄えるのが目的らしい」

徳島は首を傾げた。

「どうして秘密にするんですか？」

「理由がある」

ドラケは説明を続けた。

この世界には亜神という存在がある。それらは賢者や魔導師といった学者が、それまでの水準とはかけ離れた理論やら技術を見つけると、いつの間にかやってくる。そして発見者に対し、宿題むせとと称する無理難題を出したり、様々な枷かぎをかけようとするのだ。

それに従わず無闇むやみやたら矢鱈やたらな発明、発見を続ける者を闇まように葬ほうつたりもする。そのため学問

を極めようと日夜研鑽している賢者や魔導師からは、非常に恐れられていた（だが同時に亜神から宿題を課されたというのは、研究者として最高の榮譽でもあるから嫉妬や羨望の対象でもある）。

「そうした神々の監視から逃れるために結成されたのが、『カウカーソス・ギルド』という地下結社なのである。」

「そ、そんなことをおおっぴらに話していいのかわ？」

メイベルは尋ねた。自分こそがその亜神の一柱であるなどと紹介したことはないが、もし能書き通りの活動をしているのならペラペラと喋ってしまっただけいいとは思えなかったのだ。

だがドラケは何とも思っていないらしい。

「この程度のことはかまわんよ。俺だって知ってるし、周りの奴らも概ね知ってる。そもそもギルドの奴らは大したことが出来るような連中じゃなかった。亜神が始末に来るような新発明とか世紀の大発見なんかも無縁だった。こそこそ隠れ回ったりする必要もないのに、あえてそうしている——しかも、俺達に知られている時点でそれも満足に出来ていない——変人の集団でしかなかったんだ」

女性の体型補正用具とか人間が入って水の中を進む樽だとか、どこでも使える着火具

といったヘンテコなものばかりを作ろうとしては失敗している。もともとはそんな存在だったとドラケは語った。

「な、なるほどなあ……」

「ところがだ。その連中がここ最近になってガラッと変わった。急にこのウルースの力になるような、実用的なものを削り出すようになったんだ。大型の起重機や船渠船、大砲なんかもその一つだ。そしてその頃から、奴らのやることも本格的になってきた。以前はここにしか拠点はなかったんだが、王宮の援助を受けると研究用の施設船を増やして、あちこちに支部を構えたりするようになった」

「随分と急成長ですね。一体何があったんです？」

「新加入した賢者が原因らしい。そいつらが立て続けに優良な発明をしてるんだぞうだ」

「お前達、合言葉を告げるがよい」

するとその時、船内から麻で出来たロープを纏った人間が現れた。

そのロープは魔導師のそれに似ているが、飾り気がまったくなく頭巾を深く被って顔すら隠しているため、隠秘的、修道士的な印象が強い。

「よお、久しぶりだな、ホップズ」

そのためその人物がヒト種なのかそれともエルフなのか、はたまた他の亜人種なのか外見からはまったく掴めない。

「その名で呼ぶな、ドラケ！ 我が真名<sup>まな</sup>は星を継ぐ者、グレンダー・ラ・シーカーである！ 偉大なる大賢者にして当ギルドの大総帥だ！」

ローブ男はドラケの挨拶に答えず一方的に自己紹介した。

「さあ言え、合い言葉は？」

声や体型から察するに、この男が壮年期に入った男性であろうことは分かる。分かるのだが、やっていることはどこか児戯<sup>じぎ</sup>的だった。

「えっと……『世界の支配権を神の手から賢者の手へ。賢者こそが世を統べる者』だけ？」

ドラケはうんざり顔で答えた。そもそも既に名前で呼び合っているのに合い言葉もへつたくれもない。

「だっけ？ は不要だ！」

「いいじゃんか別に」

「お前は分かっているじゃない！ 合い言葉とはそういうものではないのだ！」

「げどさ……」

## 立ち読みサンプル はここまで

二人の間に白けた風が吹く。

こうしている間にもギルド本部船甲板では、展帆作業を終えた乗組員達が黙々と航行の作業を続けている。警備兵達もいる。だがみんな、そこで行われている茶番にはまったく関心がないという態度であった。

「ちっ……赤い外套<sup>がとこ</sup>の男ならノリノリで応対してくれるのに」

「奴はそういう芝居<sup>が</sup>がかったことが大好きだからな。だが今回は俺だけだから奴はいないぞ」

「そうなのか？ ティナエの使節としてここに来てると耳にして期待していたんだが……」

「へえ、そうなのか？ 物々しい警備がされている理由として外国からの使節が来ていると聞いていたが、その使節がティナエからだとは知らなかった。だがすまん大総帥。奴はともかく俺はあんたらの趣味に付き合うつもりはないんだ。だから諦めてくれ」

すると大総帥はローブの上から見ても分かる程に肩を落としたのである。

徳島達はギルド本部を自称する船内に案内された。

船内ではあちこちで大総帥と同じような姿をした男達が机に向かっていている。そしてこ